

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 心理学 )	氏名	神原 広平
学位授与の要件	学位規則第4条第①項該当		
論 文 題 目			
反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響			
論文審査担当者			
主 査	教授 宮谷 真人		
審査委員	教授 中條 和光		
審査委員	教授 服巻 豊		
審査委員	准教授 尾形 明子		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、抑うつとの関連が示されている反復性思考の処理モードが目標への従事という行動的側面へ与える影響を検討したものである。反復性思考とは、「自己やその個人に関する出来事について、集中して行われたり、繰り返し行われたり、もしくは頻繁に行われたりする思考」であり、その思考様式の抽象性により抽象・分析的処理モードと具体・体験的処理モードに分けられる。近年、反復性思考は処理モードによって抑うつに与える影響が異なることが指摘されているものの、抽象・分析的処理モードのみ検討されており、具体・体験的処理モードについての実証的検討は行われていない。また、先行研究における反復性思考と目標への従事の関連については、個人が実際に取り組んでいる目標ではなく、ある個人がもつ様々な目標に対する全体的な取り組みの傾向を測定しており、臨床的介入につなげるためには、個人が生活場面で取り組んでいる重要度の高い目標を扱う必要がある。そこで、本研究では、反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響について、2つの処理モードを測定して比較検討し、また、個人にとっての重要な目標についても扱い検討することを目的とした。</p> <p>本論文は、以下のように構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」では、第1節において、反復性思考の処理モードについて概説し、抑うつ症状と反復性思考の処理モードとの関連について先行研究の知見をまとめ、第2節では、反復性思考の処理モードと目標への従事との関連についての先行研究の知見をまとめた。これらを踏まえて、第3節では、本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章「反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響」では、第1節（研究1）において、反復性思考の処理モードを誘導する操作が目標への従事を与える影響について実験的に検討した。その結果、具体・体験的処理モードは抽象・分析的処理モードに比べて目標への従事を高める可能性が示された。第2節（研究2-1、研究2-2）では、反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響について、質問紙調査により縦断的な検討を行った。まず、研究2-1において、反復性思考の処理モードを測定する The Mini Cambridge-Exeter Repetitive Thought Scale の日本語翻訳を行い、日本語版 CERTS の</p>			

信頼性、妥当性を検討した。その結果、本研究で作成した日本版 CERTS は、原版同様に抽象・分析的処理モードと具体・体験的処理モードの 2 因子構造から成り、信頼性、妥当性を有した尺度であることを確認した。次に、研究 2-2 で、大学生等 50 名を対象に、1 か月の間隔をあけて 2 回の質問紙調査を実施し、反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響について検討した。その結果、具体・体験的処理モードが 1 か月後の目標への従事にも影響することが示された。

第 3 章「重要な目標における反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響 (研究 3)」では、重要な目標において、反復性思考の処理モードが目標への従事を与える影響を検討した。先行研究で検討されている目標への従事は、実際に取り組みられている重要な目標の性質を踏まえた検討が不十分であるという問題点がある。そこで、目標の達成困難度という目標の性質に着目し、困難度の高低と処理モードが目標への従事を与える影響について検討した。調査は、大学生 131 名を対象に、2 週間ごとに 5 回実施した。マルチレベル解析の結果、具体・体験的処理モードと目標の達成困難度の交差作用項が有意であった。単純傾斜の検定の結果、目標の達成困難度を高く評価した群において、具体・体験的処理モードが 2 週間後の目標への従事に正の影響を示した。一方、目標の達成困難度を低く評価した群において、具体・体験的処理モードが 2 週間後の目標への従事に負の影響を示した。以上より、達成困難な目標に取り組んでいる場合には、具体・体験的処理モードが目標への従事に正の影響を示すことが明らかになった。

第 4 章「総合考察」では、第 1 節で本研究の成果と意義を述べ、第 2 節において今後の課題について論じた。

本論文は、以下の 3 点において、高く評価することができる。

1. 反復性思考の処理モードについて、これまでは抽象・分析的処理モードについてのみ検討されていたが、本研究では、具体・体験的処理モードについても検討し、その機能を実証的に検討した点である。具体・体験的処理モードが目標への従事を増加させ、抑うつを軽減する要因になることを示唆し、抽象・分析的処理モードによる反復性思考への介入に加え、具体・体験的処理モードという新たな視点で抑うつにおける認知や行動を検討する重要性を示した。
2. 反復性思考と目標への従事の関連について縦断的に検討した点である。本研究から、反復性思考が目標への従事を与える影響は期間で異なることが示唆された。具体・体験的処理モードによる長期的な影響を明らかにしたことで、抑うつの予防因子としての反復性思考の機能を明らかにし、予防的介入につながる基礎的知見を示した。
3. 重要な目標という個人の生活に基づいた目標への従事について検討を行ったという点である。特に達成困難度という目標の性質に注目したことで、より個人がおかれている状況に合った目標の従事について検討がなされ、具体的な臨床的支援方法の方向性を示唆したといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 12 日